
紅目の魔法使い <ダーク七都3・赤い眼のアヌヴィム>

絵理依

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅目の魔法使い >ダーク七都3・赤い眼のアヌヴィム<

【NZコード】

N3712M

【作者名】

絵理依

【あらすじ】

七都が旅の途中で遭遇する、大切な出会い、四つのストーリー。
その第1話です（完結済）。

赤い目と銀の髪を持つ、美しい魔法使いの話。

地の都に行く途中の宿で、七都はアヌヴィムの魔法使いに出会う。七都をおちょくり、いやがらせをしてきた彼は、魔貴族の主人の屋敷から脱走してきたのだった。

七都は彼の過酷な過去と境遇に同情するが、彼には追つ手が迫っていた。

この小説は、他サイトでも公開しています。

また、感じる……。

七都は、立ち止まつた。そして、ゆっくりと振り返る。

太陽は既に沈み、地上が闇に包まれてから、随分時間がたつ。月が輝きを増し、そのねばつくような銀色の光の膜を、夜の景色の上にどっぷりと塗り重ねていた。

月の光が届かぬところは、真の闇。何かが潜んでいたとしても、決してわからぬ妖しい暗黒の空間。

人口の光で、深夜でも快適に補足された七都の暮らす世界とは、全く異なっている。

とはいっても、魔神族の体を持つ七都の日には、闇も昼間の影のように薄く映り、景色も遠くまで、簡単に見渡すことができた。

誰もいない。

さつきまでの気配が、消えている。

歩くのをやめたので、素早く隠れたのか。

七都が歩いてきた道には、月の光が、濃く静かにわだかまつてい るだけだった。

ただ、風が木の葉をさらさらと、涼しげに揺らして行く。動くものといえば、それくらいしかなかつた。

このあたりは、ますます魔の領域が近い。

昼間は行きかう旅人も多い道だが、闇が地上を覆い始めると、人の姿は消え失せる。

旅人たちはもちろん、魔神族を怖れているのだ。

彼らは、太陽が再び顔を出すまで、決して道に姿を現さない。ふと、歩いているのが自分だけであることに気づくと、結構あせるものがあった。

それでも七都は、構わずに歩き��けていた。

日が沈んでからのほうが快適で、歩く速さも当然増す。本当のことを言うと、昼間は日陰で眠つて、夜になつてから、日いっぱい歩きたいくらいだ。

だが、そのへんで昼間から寝るわけにもいかない。

七都が道端で寝たりすると、もちろん、ものすごく立つてしまふに違いないし、遭遇しなくともよいトラブルや危険をわざわざ呼び寄せることになる。

闇が深くなると、七都は木や草の陰で横になり、少し眠つた。携帯しているカトウースを飲み、相変わらずどこから飛んできて髪にとまる蝶の群れから、エティシルをもらひ。

朝になると、街道に姿を現した旅人たちに混じつて、マントのフードを深く下ろし、今度は、のろのろと歩き始める。グリアモスの傷のせいですぐ疲れてしまうので、頻繁に休憩しながら。

そういう行動パターンを続けて、もう三日くらいになるだろうか。この調子では、七都の足で魔の領域に到着するには、セレウスが言つたよりも、もっと時間がかかるかもしれない。

けれども、昨日の晩からだ。

七都は、何者かの視線を感じるよくなつた。

誰かに見られている。

そもそも、あたたかく見守るような視線ではなく、鋭く突き刺すよ

うなものだ。

氷のように冷たく、明らかに敵意も混じっているような気がする。視線を感じて振り向いても、その視線の主は、むろん、見つけることはできない。

その感覚は、太陽が昇る少し前になると、突然消え失せた。気のせいかと思ってもいたのだが、日が沈んでしばらくすると、再び同じ感覚が戻ってきたのだ。

誰かにじつと見つめられている。氷のような視線で。

魔神族？

七都は、誰もいない道を眺めて、不安げに思つ。

太陽をおもいつきり避けて、夜しか現れないなんて。やつぱり、魔神族なのかもしれない。
なぜ姿を現さないで、自分をただ見ているだけなのかはわからな
いが。

もしかして、アヌヴィムの魔法使いだと思われているのかもしれ
ない。額に銀の輪をしているのだから。

七都の額の輪に気づくと、さすがに人間たちは、近寄っては来なかつた。

七都を見つけて、親しげに話しかけて来ようとした若い男性たち
も、しばし押し黙り、結局立ち去つてしまつ。

やはり、アヌヴィムの魔法使いは怖れられているらしい。

アヌヴィムの主人は魔神族。背後には必ず魔神族が存在するのだ。
だが、それが効くのは人間に對してだけ。

魔神族は、どういう反応を示すのだろう？

ゼフィアは、魔神族の前では、この輪はしないほうがいいと言つていたが。

昨日は、もっと遠くから見つめられていたような感じがする。けれども、さよは、さらに近くなった。

そう遠くなこといろいろから、じつと見られているのを感じる。気配も際立ってきた。

このまま野宿などしたら、襲つてくるかもしれない。グリアモスじゃないなんて、言い切れないのだから。

とにかく、人間の中に混じってしまったほうがいいかも。七都は、と思う。

視線の主も、たくさんの人間と、明るい光に囲まれている七都には、接触しにくいに違いない。

ふと見渡すと、さよはこそこそ、じれりぱりした一軒の宿があった。

橙色のあたたかい光が、窓からこぼれるくらいに溢れている。旅人も、大勢泊まっているそうだ。

七都は迷うことなく、その扉を開けた。

途端に七都は、何層にもなった、賑やかな音に包まれる。扉の正面にはカウンターがあり、宿屋の主人らしき中年の男性が座つていた。

カウンター以外の空間には、テーブルと椅子が雑多に並べられ、客たちが飲食をし、陽気に騒いでいる。

客たちの、大声で話す声、笑い声、酔っ払つて叫ぶ声。食器の音。そして、そこに渦巻く、料理や酒の匂い。

それは、ほつと出来るものではあった。大勢の人々がそこにいるという証しなのだから。

けれども、七都は、気分が悪くなる。
魔神族の体は、人間の食べ物を、やはりどうしても受け付けない。
こういう閉ざされた空間にこもった食べ物の強い匂いも、どうやらだめらしい。

七都が姿を見せるとき、客たちは、さりげなく七都を観察した。
だが、額にはめているV字型の銀の輪の意味を理解すると、途端に視線をそらし、それまでの行動を何事もなかつたかのように、続けるのだった。

「お泊りですか、アヌヴィムの魔法使いのお嬢さん」

宿の主人が、七都に話しかけた。

「あ、はい。部屋、空いてます？」

「もちろん、空いてますよ。前払いでお願いしますね」

主人が、七都を疑り深く、無遠慮に眺める。
後払いにして、何度も宿代を踏み倒された経験があるのかもしれない。

七都は上着のポケットから、小さな布袋を取り出した。
中から金色の硬貨をつまみあげ、宿の主人に手渡す。

「足りますか？」

主人は、その金貨を手のひらに乗せたまま、あんぐりと口を開け

た。

「足りるのか。十泊されたって、お釣りがたくさんありますよ」

「そうなんですか。一泊でいいんですけど」

「では、こちばんいい部屋を使っていただかなくてはいけませんね」

金貨が入った袋は、上着のポケットに、最初から入っていた。町を出てしまふ歩いてくるうちに、七都はポケットにそれが入れられてることに気がついたのだ。

金貨は、全部で五枚、入っていた。

一枚でこいついう宿に十泊以上できるなら、七都にとっては、結構な大金ということになる。

もちろんゼフィアが、さりげなくポケットに忍ばせておいてくれたに違ひなかつた。

宿に泊まつて、あたたかいベッドで眠ること。人間の食べ物も水も買う必要のない七都にとつては、それぐらいしかお金を使うことはない。

ゼフィアは、そのことも見越していたのかもしれない。

夜になつたら野宿なんかしないで、きちんとベッドでお眠りなさい。

彼女にそう言われているような気がした。

(ありがとうございます、ゼフィア)

七都は、改めて彼女に感謝する。

今夜は宿に泊まるよ。お金は遠慮なく使わせてもらひうね。

「お食事は?」

宿の主人が七都に訊ねた。

「いりません」

七都は答えたが、ふと考える。

食事をしなかつたら、あやしまれるかな。

「えーと、その。ちょっと疲れすぎて、気分がすぐれないんで」

その時、誰かが、七都の三つ編みをした髪を後ろから、ぐいと引つ張った。

「え?」

宿の主人が、ひいっと叫んだ。

七都の三つ編みの髪の先は、壁の中に入れこんでいた。

壁の表面から、髪が垂れ下がっているような状態になつていて

なに、これ……。

七都は、呆然と、自分の髪を見下ろす。

引っ張つてみたが、髪は壁から抜けなかつた。

固く、壁の中にぬりこめられている。

魔法？

誰かが、魔法を使って、ちよつかいをかけている？

「だ、だいじょうぶ、お嬢ちゃん？」

宿の主人が、あせりまくって、七都に訊ねる。

「だいじょうぶじゃないですっ！」

七都は、叫んだ。そして、客たちをさつと見渡した。
この中に、いる。

魔法を使って、こんなくだらないいたずらをした、誰かが。

すぐに七都は、ホールの隅で、酒の入ったグラスを片手に持つて、
笑いをこらえている一人の若者を見つけ出した。

あいつだ。

魔法で七都の髪を壁に埋め込んだ、張本人。

七都は、その若者をキッと睨む。

歳は、二十歳過ぎくらい。

髪は漆黒で、背中までの長さがあった。

にやにやしながら七都を見つめるその目は、透明な琥珀色。

そして、その美形の若者の額には、七都と同じ、V字型の銀の輪
がはめられている。

(アヌヴィムの魔法使い……！)

七都は眉を寄せて、彼を眺めた。

確かに人間は、七都の額の銀の輪を見ると、怖れて接触するのは控えてくれる。

けれども、相手がアヌヴィームの魔法使いだと、話は別かもしだらかだった。

おそらく、若い女の子のアヌヴィームとこいつことで、完全に、甘く見られている。

この先、アヌヴィームの魔法使いに遭遇したら、こいつは、馬鹿と起こってしまうことなのだろうか。

こんなのは、当然、納得出来ない仕打ちだ。

七都の髪は、わらじで、ずるずると壁に引き込まれた。

泣きそつとなるくらい、情けなくなる。

七都は、唇を噛んだ。

理不尽だ。何である人に、こんなことをされなければならぬのか。
怒りが、じんわりとこみ上げてくる。

七都がその若者を睨むと、彼もその琥珀色の目で、七都をじっと見返してきた。

魔法をたつぱりとたたえたような、不思議な目。

外見よりも、年齢ははるかに上だらう。ゼフィーラよりも年上かもしれない。

当然魔法に関しては、七都より彼のほうが経験豊富だし、使い慣れている。

けれども、精神年齢は、ゼフィーラよりもはるかに下だ。

セレウスだつてもちらん、こんな、女子に意地悪をして喜ぶようなことなんて、絶対にしない。

最低だ。

とにかく、あの魔法使いには、七都が魔神族であることを理解させて、やめてもいいしかない。

(今すぐ、髪を元に戻しなさい…)

七都は、心の中で、彼に言つてみた。伝わるかどうか、半信半疑だつたが。

(ちょっとした挨拶だよ。そんなに怒ることもないんじゃない?)

彼の声が聞こえた。

正確には、声ではなく、彼の言いたい言葉が、直接頭に届いてきた。

彼は唇を一切動かしていないし、話すには、距離が離れすぎている。

(あなたには挨拶でも、わたしにはいやがらせにしか思えない)

(それは、まあ、人それぞれの見解だな)

(わたしは、いやがつてるの。とにかくいやなの! わかるでしょ。人が困っているのを見るのが、そんなに楽しい?)

(そんなに深刻に捉えなくとも)

彼が、くすつと笑う。

(深刻だ! 早く髪を戻しなさい…)

七都は、叫んだ。

(あなたも頭の固い女だな。微笑んで無視するとか、適当にあしらつて済ませばいいだけのことなのでは?)

(わたしがそう出来るような物わかりのいいオトナになるまでは、たぶん、まだあと十年以上はかかる)

(では、十五年後くらいに、もう一度あなたに会ってみたいものだね)

彼がのんびりと言ひて、手に持っていたグラスに口をつけた。

七都の髪は、さりげなく壁の中に消えた。

このままでは、壁に留めつけられてしまつ。

(しつこーー 人がいやがることをするな! 第一、酔っ払いと遊んでるほど、わたしは暇じゃないんだ! セツセツと床せ! !)

七都は、強い思念を彼にたたきつけた。

彼の口元から、笑いが消える。

怒ったか?

七都は、身構える。

七都の髪は、ぐいと強く引っ張られ、壁に引き込まれた。

顔がのけぞる。

やめる気はなさそうだ。

これつて、宣戦布告?

七都はしばし目を閉じ、深く呼吸をする。

それから、ワインレッドの皿を見開いた。

若者が手に持っていたグラスが、粉々になつて、はじけ飛ぶ。グラスに入つていた酒もこぼれ散つて、彼の顔と髪をぐつしょりと塗らした。

彼の琥珀色の目が、赤く燃えるような様相を帶びる。

彼は、手のひらに残つたグラスのかけらを握りつぶした。かけらは輝く透明な粉になり、テーブルの上に散らばつた。

客たちが凍りつき、宿の主人が、おろおろと一人のアヌヴィムの魔法使いを見比べる。

ここで魔法を使った喧嘩はしないでくださいよ。お主人の顔には、そういうセリフが張り付いていた。

いい加減に、わかりなさい。

あなたが相手にしているのは、アヌヴィムの魔法使いの女の子じゃない。

あなたの主人の同族だ。

そして、あなたが今やつていることは、わたしたちに對して、決して許されることではない。

七都は、静かに彼を見据える。威厳を保つて、顔を真つ直ぐに上げて。

魔神族は、アヌヴィムよりも、立場は上。

それは、ゼフィーリアが七都に何度も言つて、わからせようとしたこと。

当然、この魔法使いも、そのことは承知しているだろう。知りすがるくらいに。

(魔神族か……?)

彼の言葉が、七都の頭の中で現れて、消えた。
それには、驚きと戸惑い、そして、あきらめと絶望感のようなもの、付属品として確かにくつついていた。

七都の髪が、壁から、すうっと抜け出てくる。

よかつた。やっとわかつてくれた。大」とにならずに済んだみた
い。
七都は、取り戻した自分の髪が無傷であることを確認し、安堵する。

「じめんなさい。ちよつとひやひやさせられましたね」

七都は宿の主人にっこりと笑いかけ、それから部屋の鍵をもらつて、階段を上がった。

ホールは、再びそれまでの喧騒を取り戻した。何事もなかつたかのようだ。

アヌヴィムの魔法使いの若者は、思いつめたような目を宙にさまよわせ、注文した何杯目かの新しい酒を一気に飲み干した。

部屋に入るなり、七都はカトウースの容器を置き、メーベルルの剣とセージにもひつた胸当てをはずして、ベッドに勢いよくダイブする。

ベッドは、七都の体を包み込み、しつかりと支えた。もちろん、ゼフィアとセレウスの館のベッドほどふかふかでも、洗練されてもいなかつたが、それなりに丈夫なベッドで、きちんと整えられ、清潔でもあつた。

「あー、きょうは、屋根つきの建物のベッドの中で、気持ちよく眠れる……」

七都は亥いて、ベッドに寝転がる。

そして、ベッドからの低い目線で、部屋の中を見渡してみた。

そこは二つの狭い続き部屋になつていて、一応寝室とリビングに分かれていた。

家具は、ベッドと、テーブルに椅子二脚、そして備え付けの棚のみ。この宿屋に見合つた感じの、デザインよりも実用性にこだわった調度品だ。

いちばんいい部屋にしては粗末なものではあつたが、一泊だけ過ごすには、十分だった。

しばらく寝転がつたあと、七都はおもむろに上半身を起こし、服の隙間から、そつと胸を覗いてみる。

相変わらずそこにあるのは、目をそむけたくなるような、恐ろし

い傷。グリアモスの爪で引き裂かれた痕だった。

「の傷をさらじてふらふら歩いたら、ゾンビにしか見えない。

七都は、自虐的に思つ。

けれども、胸の傷は、少しづつではあるが、治つてきているような気がする。

暗黒が中に見えている傷口は、以前よりはふさがつた。気休めかもしれないが、確かに小さくなつたような感じがする。

やつぱり、カトウースと蝶のエティシルのおかげだね。カトウースがお菓子でも、蝶には、ハンバーガーとか、たこ焼き程度の力はあるはず。

少しずつでも、傷口がふさがつていってくれば……。

もしこの状態のまま、元の世界にもどつたら、どうなるんだろう。七都は、ふと考えてみる。

やつぱり向ひでも怪我がそのままだらうから、たぶん救急車で運ばれて、病院直行……だよね。

で、もちろん、長期入院。夏休みどころか、一学期になつても、余裕で、まつたつひとつり病室の中。

果林さんにも、心配と迷惑をかけてしまつ。料理の学校に行くどうひじやなくなるに違ひないもの。

その前に、果林さん、傷を見た途端、氣を失つかも。となると、帰るまでには、絶対にこつちで治をなきや。

風の城には、魔神族のお医者さんつているのかな。

ナチグロ＝ロビンも、もうそこでは意地悪はしないよね。

ちゃんと手当してくれると信じじよつ。

彼が出来なくても、リュシフィンなら、出来るだらう……。

コードが言ったように、傷口を跡形もなく、きれいに治そうとするなら、魔王かグリアモスのエティシルがいるのかもしれない。だとしたら、リュシフィンは魔王、ナチグロ=ロビンはグリアモス。二人とも揃っている。

だが、彼らがエティシルを快くくれるとしたところで、自分は何の抵抗もなく、素直にもらう気になれるのだろうか。

窓の外で、微かな、ぱたぱたという音が聞こえる。

ガラスの向こうで、蝶の集団が舞っていた。

蝶たちは、透明な羽根でガラスをたたいている。

「晩ご飯！」

七都はベッドから起き上がり、窓を開けた。
蝶たちが、七都の髪に、次々と止まる。

窓の向こうには、広めのバルコニーがあつた。

七都は蝶を引き連れてバルコニーに移動し、手すりにもたれかかる。

宿の一階のホールのあたりからは、まだ部分的に人々の賑やかな声が漏れてはいたが、地上は静寂に包まれていた。

月の光が夜の景色を、青味を帯びた銀色に染めている。

そのどこからも、あの冷たい謎の視線は、感じられなかつた。気配も全くない。

七都は、ほつと胸を撫で下ろす。

やはり、人間のいるところには近づいて来ない。

とはいえ、視線の主が魔神族なら、いざれは七都の前に姿を現すに違ひなかつた。

もうすぐ、魔の領域。

人間にに対する遠慮も一切いらないし、夜でなくとも活動できる。そこに入つてしまえば、視線の主とは対峙せざるを得なくなるのだ。

当然相手は、七都よりも魔の領域に詳しいだらう。魔力も使えるだろうし。

もし戦いを挑まれでもしたら、圧倒的に不利かもしれない。

それにして、いつたい、何者なのだらう。

静かで冷たい、絡みつくような視線。

憤つたような、けれども、少しだけ悲しみが混じつたような……。

ともかくその視線には、七都に対する敵意は確かにあるようだつた。

何となく、とても嫌われているような気がする。

町を出てから、七都の感覚は、次第に鋭くなつた。

というより、この世界に来てから、徐々に鋭くなりつつあるのかかもしれない。

魔力も少しづつ、思い通りに使えるようになつてきた。

ティエラが隠していた剣も、簡単に見抜けた。謎の視線の存在もわかつたし、先ほども、あの魔法使いのグラスを粉々にした。中身を彼の顔と髪にかかるようにぶちまけることにも、ほぼ成功。

魔力は、どうやら、気負つて使おうとするど、だめみたいだつた。無意識に、自然に使つと、驚くほどうまくいく。

難しいことを考えないで、リラックスして直感で使うのだ。手や足を動かすように。目で物を見るように。そう、ナイジェル

が言つたよつて。

七都が指を立てるとい、蝶が一匹、髪から離れて、その先にとまつた。

「いただきます」

蝶が、七都の指の先で分解する。銀の粉が飛び散つた。

「う……。気持ち悪い」

七都は、顔をしかめた。

何十回蝶を食べても、慣れない。体の中に流れ込んでくるエディシルは確かに美味だが、蝶が消える感覚は、やはりぞっとするものだった。何せ、生きたままその生命を絶つて、自分の糧にするのだ。

蝶の踊り食い……。

七都は、ため息をつく。

カトウースは、もうほとんど残つてはいなかつた。あと数回飲むと、なくなつてしまつ。となると、頼れるのは、この蝶だけになる。

ごめんね。わたしが生きるために。ありがとうございます。いただきます。

「臣田の蝶は、七都の唇に触れて、はじけ散った。

抑えないと、吐き気がしそうだ。

だが、心地のよいあたたかい流れが体の中に入り込み、疲れを癒して行く。

「やはりあなたは、魔神族ですね」

誰かが七都の右斜め後方で、呟いた。

七都は、思わず振り返る。

蝶たちが、七都の心の動きに敏感に反応し、それをあからさまに表現するかのように、一斉に宙を舞つた。

あの魔法使いが、そこに立っていた。

七都の髪を壁の中に埋め込み、七都にグラスを割られた、アヌヴィムの魔法使い。

彼は、琥珀色の透き通つた不思議な目で、七都を見つめている。「勝手に入つて来ないでくれる？　ここは外だけど、この空間は、一応わたしの部屋の一部なんだからね」

七都は、彼を睨んだ。

「まだ怒つておられます？」

「当たり前でしょ。言つとくけど、あなたの第一印象は、ものすごく悪いから」

魔法使いは微笑んで、その場にひざまずいた。

そして頭を丁寧に下げる、手を胸の前で折り曲げる。

とてもきれいに優雅な仕草だった。

今までそのような挨拶を七都に行なつた、誰よりも。

そのポーズも、絵から抜け出てきたかのように、きちんと決まっている。

それはもちろん、彼が美しい若者であることも、その優雅さを増幅させる一因に違ひなかつた。

彼は、セレウスやコード以上に端正な顔立ちをしてゐるし、物腰もどこか洗練されていた。

そしてこの人は、こういう動作をすることに、非常に慣れている。七都は、直感的に思つた。

おやぢらぐ、何千、いや何万にもなるかもしぬない回数を、魔神族の主人の前で、日常的に行つてきたのだらう。

「先ほゞのことは、お許しください。決して悪氣があつたわけではありません」

彼が頭を下げたまま、言つた。

「女の子をいじめちゃだめでしょ。女の子には親切にしなきゃ、嫌われるよ」

「かわいい女の子がいると、ちょっとかいを出してみたくなるのが、男の性というものですよ」

彼は微かに笑つて、七都をちらりと見上げた。

「やうこりんと自分があきれた行動の、都合のいい言い訳にしな

いでほしいな。男の人にとっては軽い冗談でも、女の子にとっては悔しいし、悲しいし、横暴なことにしか思えない」

「しかし、あなたの行動も、感心できるようなものではありませんよ」

「うへ。 この人、 やんわりと反論してくれる。

七都は、さらに彼を睨む。

けれども、魔法使には続けて言った。

「ああいつたことでいちいち憤慨して反応していたら、きりがありません。第一、相手を怒らせたら、やつかいなことになりますよ」

「やつかいな」とつて?」

「巻き込まれなくてもいい災厄に、自分から飛び込むようなものです。確かにあなたは、強力な魔力をお持ちのようですが、まだ使いこなせてはいない。今まともに私と戦つたら、とても勝ち目はありませんね。私は簡単にあなたを組み伏せられる」

「それ、わたしを脅してるので?」

「脅してこるのはなく、忠告してさしあげてこるのである」

彼が言った。

七都は、眉を寄せる。

忠告か。

ゼフィアにしろ、セレウスにしろ、この人にして

アヌヴィムの魔法使いとこりの人は、忠告が趣味か？

「多少腹が立つても、『自分を抑えて、取るに足りぬ無価値な接触は無視するか、軽くあしらって通り過ぎなくては。それもまた、賢く生きる術ですよ。関わり合いたくなると、かくなことになりますん」

「つまり、我慢しようと。悔しくても、情けなくとも。何でこっちが我慢させられなきゃならないの。そもそも、ちょっとかいをかけてくるあなたがいけないわけでしょうが。無視したり、軽くあしらってくれることを前提にちょっかいをかけるなんて、完全に相手に甘ててるよ」

「手厳しいですね」

魔法使いは、ニヤッと笑った。

「だが、理不尽なこともそれなりに受け入れていかなければなりませんよ。危険を回避して、穏やかに生きていくためにはね」

「こやなことはこやだって、ほつきつ言わないと相手にわからないし、わからなこままだと相手が図に乗る。あなただって、誰かに理不尽なことをされたら、文句言ひはじょ？」

「私の場合は、文句を言つたって、どうにもならないんですよ。最初から無駄なこと。だから、今、この宿について、ホールの隅で、決して酔えない酒なんぞかつくらつているわけだが」

「お酒に酔えないの」

「アヌヴィムは、どれだけ酒を飲んでも、酔うことはない。おそらく

く、魔神族に提供するエティシルがますくなるのを防ぐためなのでしょう。ご存知ではなかつたのかな？ 魔神族のお嬢さま

「知らない。じゃあ、酔つ払つて、わたしをおちよくなつたわけでもないんだ」

「だから、あなたに酔つ払いなんて言われたのは、心外でしたね」

彼は、ふつとため息をつく。

「それにして、あなたが魔神族だと見抜けなかつたのは、情けない限りです。私ともあうつものが……」

「でも、あなたを騙せたつてことは、一応わたしは、アヌヴィムの魔法使いにうまく化けられてるつてことだよね」

「そうですね。ただ、アヌヴィムの魔法使いにその蝶が止まる」とはありませんし、蝶を食べることもありません」

魔法使いは、蝶をリボンのようになにかとめている七都を、改めて見上げた。

「その蝶は、前菜ですか？ それとも、食後のデザート？ この宿には、あまりよいエティシルを持った人間は泊まつていないです。それこそ、酔つ払いだらけだ」

「関係ないよ。人間のエティシルは食べないことにしてるから」

「ほう。それはまた、なぜ？」

魔法使いが驚いたように、だが、少し興味を引かれたような面持

ちで訊ねた。

「要するに、いやだからー！」

七都は、投げやりに答える。

「では、あなたのお食事は、その蝶だけですか？」

「あとは、カトウースのお茶。でも、もう飲んじゃって、ほとんど残つてないから、もうすぐこの蝶だけになっちゃうけどね」

「カトウースは、魔の領域の中なら、あらゆるところに咲いてますよ。これから行かれるのでしょうか？　しかし、カトウースと蝶だけの食事内容なんて、賛成は出来ませんね」

「ほつといて。あなたはどこから来たの？　魔の領域？」

「そうです。光の都から」

「じゃあ、あなたの『主人は、光の魔神族？』

「そうこう」とです。……ああ

魔法使いが、琥珀色の目を伏せて、うめき声をあげる。それから彼は、力なく立ち上がった。

「その主人が来たようですね」

「え？」

第3章

何かが地を駆けるカツカツという音と、ウイイインという機械の音が、絡まり合って聞こえた。

あの音は……。

七都は、バルコニーから下の景色を眺める。

円の光をきらきら反射させながら、何か白い物体が三つ、道の向こから、滑るように走つてくるのが見えた。

「……機械の馬？」

メーベルルが乗つて来て、そしてナイジェルが乗つて行った、あの機械の馬と同じ音が近づいてくる。

「私の追っ手です」

魔法使いが呟いた。

「追っ手？…………ってことは、あなたは逃げてきたの？『主人のところから？』

「そうです。理不尽なことに文句が言えない立場なもので、逃げるという行動に移したわけです」

「だけど、そういうこと、してはいけないんじや……」

「まあ、そうですね。アヌヴィムにとつては、一番許されないことです。主人に対する裏切り行為ですから。では、私は、これにて捕まるわけにはいきませんので」

彼は、七都に軽く頭を下げた。

七都は、思わず彼に訊ねる。

「逃げられる?」

「さあ……。もうあんなとこに来てますからね。近すぎます」

魔法使いは、他人事のように言った。

「でも、あきらめずに逃げなくてはね」

追つ手は、もつはつきりとその姿を現していた。

メーベルルの馬は黒かつたが、その三頭の馬は、真珠色がかつた銀色だつた。

それぞれ、馬上に人影も見える。おそらく、魔神族が三人瞬く間に、近づいてくる。

「隠れて!」

七都は、自分の部屋を指差した。

「私の第一印象は、すこぶる悪かつたのでは?」

魔法使いが、意外そうに言つ。

「そんな場合、じやないでしょ。困っている人がいれば、助けなければね」

七都が怒ったよつに言つと、魔法使いは一礼して、部屋の中に消えた。

そのすぐあとに、機械の馬が、七都の立つているバルコニーの下を通り過ぎる。

先頭の馬には、白いマントに、輝く赤銅色の長い髪をなびかせた人物。顔には、猫の仮面を被つてゐる。

メーベルルの仮面とは、違つたデザインのものだつた。笑つているのではなく、目を開いた、睨みつけるような猫の顔。

残りの一頭には、全く同じ格好をした人物が跨つていた。尖つた耳を頭の上に立てた兜をすっぽりと被り、黒いマントで体を覆つてゐる。その兜もまた、猫を模してゐるようだ。

七都の視線に気がついたのか、先頭の人物が、七都のほうに顔を向けた。

仮面の下の、紫色がかつた青い目が、七都の姿を捉える。

七都とその人物は、しばし見詰め合つた。

それは一瞬だったが、とても長い時間のように思えた。

機械の馬は、いきなり走るのをやめた。

急ブレーキだ。

だが、馬上の三人は動じることなく、きびすを返す。

すぐに一行は、七都のいるバルコニーの下まで駆けてきた。

機械の馬は一斉に静かになり、先頭の人物が進み出て、七都を見

上がる。

猫の仮面がはずされ、白い顔が現れた。
ネイビーブルーの目。薄紅色の唇。赤銅の髪がきらめく。
本当の年齢はわからないが、見た目は、二十代半ば。
美しい魔神族の青年だった。

七都は、バルコニーの木製の手すりをぎゅっと握りしめる。

怖気づかない。
こわがらない。

七都は、心の中で、自分に言い聞かせるように呟いた。

わたしの同族だ。緊張する必要もない。
リラックスして、話そつ。

「アヌヴィムのふりをして、ご旅行ですか？」

彼が言った。

どうやら、七都が魔神族だということは、わかつたようだ。
アヌヴィムの魔法使いの印である銀の輪に惑わされることもなく、
七都の正体を見破った。

もつとも、あの魔法使いが言つたように、蝶を髪にとめているの
で、そうわかつたのかもしぬなかつたし、その前に、同族の気配み
たいなものを感じたのかもしれない。

「この輪は、身を守るためです

七都は、答える。

「おひといつか?」

彼の質問に、七都は頷いた。

「私の名は、ジユネス。光の魔神族。あなたはどういうの?」

「わたしは、風の魔神族。名前は、ナナト」

「風の……?」

ジユネスは、驚いたように咳く。

「風の魔神族の方にお会いするのは、初めてですね。もうほとんど残っていないと聞くが」

「なぜほとんど残っていないのか、ご存知ですか?」

「随分昔のことですが、何か事故が起つて、風の都は壊滅状態になつたとか」

「壊滅? なぜ……」

「わかりません。我々には、隠されていることがありますから。魔王さま方のみがご存知でしょう」

「水の魔王さまは、知らないみたいだつたけど……」

「シルヴェリスさまは、外の世界から来られた方。それに、最近即位されたばかりでもあられ、そのことはござ存知ないでしょ？昔からの魔王をまだがご存知のこと」

ジュネスは、紫がかつた青い田で七都をじっと見つめる。

「しかしながら、シルヴェリスさまと」懇意にされていとは、あなたはただ者ではないようですね。これから、風の都へ？」

「ええ」

七都は、短く返事する。

「ところで、このへんで、アヌヴィムの魔法使いを見かけませんでしたか？ あなたと同じ銀の輪を額にはめている。名前は、シャルディン。黒髪に、赤味がかつた黄色の田をしているのですが」

「この宿のホールで、わたしにいたずらを仕掛けてきたアヌヴィムの魔法使いがいました。確か、そのような風貌でしたよ。でも、随分前に出て行つたようです」

「そうですか。もしその魔法使いが私のアヌヴィムならば、お許しを。では、もう少し先を探してみます」

「お気をつけて、ジュネス」

「ありがとうございます。あなたもお気をつけて。けれど、ナナト。あなたのエディシルの弱さは、尋常ではないですね。魔力は強いものを感じますが。いったいこれは……」

ジュネスは、探るように七都を見上げる。

七都は、思わず胸に手を当てた。

「病氣か？　いや、怪我をされているのかな。　だいじょうぶですか？」

「だいじょうぶです。　ありがとうございます」

「では、失礼を」

ジュネスは、猫の仮面を被った。

魔神族を乗せた三頭の機械の馬は、再び隊列を組んで、駆けて行く。

その姿は、瞬くうちに消えてしまった。

あのお供の一人は、下級魔神族。グリアモスだ。

七都は、思った。

兜の中で輝いていたのは、油断のならない、透き通った金色の目。あの魔法使いが追つ手から逃れるためには、相当苦労することになるかもしれない。

七都は、部屋に戻った。

部屋の中に、あの魔法使いの気配は、一切感じられない。つまく隠れているようだ。

（でもね……）

七都は、真っ直ぐベッドに向かい、その下を覗き込む。魔法使いが仰向けになつて、横たわっていた。

「安易というか、安直というか。子供がかくれんぼするときだって、もつとましなどに隠れるよ」

七都は、彼に声をかける。

「ましなどに隠れる?」

「天井裏に隠れるとか。魔法を使って、壁と同化するとか」「魔法なんか使用したら、ここにいますと宣言しているようなものですよ」

魔法使いは、琥珀色の目で七都を見上げた。
そして、手を伸ばして、七都の手首をつかむ。

セレウスと同じ体温。
一瞬めまいがしたが、七都は自分を立て直す。

「怪我をしているのに、蝶とカトウースが食事ですか。ヒテイシリ
が弱いのも当たり前だ」

「はなしてよ」

七都は、彼を睨んだ。

「グリアモスですね、あなたに傷を負わせたのは……」

「あなたの追っ手の中にも、グリアモスが一匹、いたよ」

魔法使いは、深いため息をついた。そして七都から手を離し、ベッドの下からするりと抜け出る。

彼は立ち上がり、窓の外をじっと眺めた。

「お暇な方だ。自ら私を捜しに出て来られるなどと
彼が呟いた。

「何でジュネスから逃げたの、シャルティン」

「行きたいところがあるからです」

その魔法使い シャルティンが答える。

「行きたいところ？ そんなに大切なところ？」

「私の家族のところへ……」

シャルティンが、寂しそうに微笑む。

「あなたの家族……」

「私は子供の頃、魔神族にさらわれたのです。それ以来、家族に会つていません」

「そうなの……」

「この人は、魔神族に、とてもひどいことをされたんだ。

七都は、穏やかな表情で七都を見下ろす魔法使いを、複雑な気持ちで眺めた。

「五十年以上も前のことですからね。家族も、元氣でいるかどうか。もう誰も残つていなかもしれない。私にとつて、今が最後の機会なのです。今帰れば、運がよければ家族の誰かに会えるでしょう。でも、この時期を逃したら、残つていた家族も年老いて死んでしまう。私の家族は、普通の人間ですからね。私のように長生きは出来ない。もつと後で帰つたら、おそらく私を待つてくれている人は、誰もいないでしょう。私は、たくさん並んだ私の家族の墓の前に、ただ佇んで泣くことしか出来ない」

「きっと、念えるよ、シャルティン。家族はいっぱいいるの?」

「父と母と、兄と妹」

「じゃあ、必ず誰かに会えるね。全員、元氣かもしねないし」

シャルティンは、笑つて七都を抱きしめた。

「あのお。気安く触らないでほしいんですけど」

七都は口を尖らせ、小さく呟く。

同じアヌヴィムの魔法使いでも、ゼフィーラとは、なんかものすく態度が違う。

アヌヴィムって、受身じやなかつたの?

「ありがとうございます、ナナトさま。感謝します。私をかくまつてくれて。あなたにはひどいことをしたのに」

「でも、魔神族もあなたに、ああいういたずらとは比べものになら

なごくりこの、ひどことをした。わたしの同族だ

「あなたが罪悪感を持つ必要はありませんよ」

シャルティンは、やせこいで七都を見下ろした。

近い……。

七都は、シャルティンの腕をやんわりとさすし、彼からゆきりと離れる。

まつたく。

わたしが自分を失つて暴走して、おまけに魔力を使ってあなたを襲つたら、いくら魔法使いのあなただって、きっと抗えないよ。

「風の魔神族には、私は会つたことがありますよ」

シャルティンが言つた。

「えつ……」

「会つたといつゝ、見かけたといつたほうが正確かもしれません

が

「こつ……どじでっ

「一昨日だったかな。ここよりもっと東にある店でした。私は例のジとく、飲めない酒をくらつていたが、少し離れたテーブルに、彼が

が

「彼？ 男の人？」

シャルディンは、頷いた。

「外見の年齢は、ジュネスさまくらいですね。他の客が、彼のことについて、ひそひそ小声で話していました。だから、彼のことを知つたわけですが……」

「あまりいい話じゃないわけだ」

「彼は、魔神族だということを公にしている。そして、魔神獵人をしているらしいです」

「魔神獵人！？」

七都は、頭を殴られたような気がした。

魔神獵人つて？
風の魔神族が？

コードやカーディナのように、エヴァンレットの剣を手にして、魔神族を狩っていること？
なぜ……。

「じゃあ、もしわたしがその人に出会つたら、わたし、その人に狩られちゃうのかな」

「貴重な同族を殺すような真似はしないと思いますけどね。もし運よく出会えたら、事情を聞いてみられては……」

「うん。 もちろんそういふけど……。 名前とか、知ってる?」

「彼の名前は、カーラジルト」

「カーラジルト。覚えておく。絶対、忘れない」

七都は、その名前を何度も繰り返して発音してみた。

「魔神狩人の間では、『化け猫カーラジルト』などと呼ばれている
ようです」

「化け猫? なんで……?」

「猫のように、口が耳まで裂けているとか」

シャルティンは、両手で唇から耳まで、なぞつて見せる。

「で、裂けてたの? あなたは彼を見たのでしょうか?」

「そんな様子はなかつたです。私が見た限りではね。いい男でした
よ。ジユネスさまと同じくらい、いい男かもしません」

「じゃあ、相当の美青年ってことか」

「会うのが楽しみですね」

シャルティンが、にまつと笑う。

「でも、こきなりエヴァンレットの剣で襲つてこられたら、たまつ
たもんじやないな」

「だいじょうぶですって。物分りのよそそつな、穏やかな物腰の男でしたから」

「うふ……。だといいけどね」

「では、ナナトさま。私は、これで

シャルディンは、胸に手を置く。

「これから行くの？ 家族に会いに

「夜のうちは、まだ危ないですからね。外には出ません。この宿で一晩過ごして、夜明け近くになつたら、出発します。今夜は、あなたのおかげで、ゆっくり寝られそうだ。追っ手はもつて、ここには来ないでしょうから」

「そうだね。安心して、ゆっくり眠つたらいい

「本当なら、私のHディシルをあなたに差し上げたいところなのですが、私もまだ、これから力がいるので。申し訳ありませんが」

「Hディシルは、いらない。その気持ちだけで十分です。おやすみ、シャルディン

「おやすみなさい、ナナトさま」

シャルディンは一寧に頭を下げ、優雅な身のこなしで、ドアから出て行つた。

第4章

少女がひとり、目の前にいた。

やわらかい金色の長い髪をおさげにしている。
髪の間からこぼれるうなじが、不安になるくらい、か細い。
後ろ姿が小さくて、華奢で、かわいらしかった。

彼がおさげを引っ張ると、少女は怒った顔をして、振り返る。
薄い空色の目が、彼を睨みつけた。

「母さまあー、また、シャルティンがいじめるつーー。」

少女が叫んだ。

違うよ。

かわいいからだよ。

きみの怒った顔もかわいいから、見たいんだよ。
だから、ひょっとだけ、さわってみたくなる。

「おまえなあ。女の子をいじめたら、もてないぞ」

彼の兄が、あきれたように囁つ。

兄は、彼よりも五つ年上。妹のリュティは、三つ年下だった。

「そういうあなたも、シャルティンくらいの歳には、女の子を泣かしてたわよ」

彼の母が微笑んだ。

「いつも微笑みを絶やさない、やわしこ母。リュディと同じ、金色の髪。

「私も、子供の頃には、女の子をいじめて嫌われていた。家系だな

父も笑う。

「ま、最終的には、母さんみたいな美人と結婚できたわけだから、悲観することはないぞ」

母は、ぽんと、軽く父の腕をたたいた。

「シャルティン。もう当分、口きいてあげないから

リュディが、むくれる。

困ったな。どうすれば、機嫌を直してくれるの？

「じゃあ、ピアナの花を摘んできて

リュディが言った。

わかった。摘んでくる。

「シャルティン。もうすぐ日が暮れる。外に出ないで

母が心配そうに言った。

「あなたは、それでなくとも田立つんだから。もし、魔神族にでも田をつけられたら……」

だいじょうぶだよ。

今の季節は、日が長い。

暗くなるまで、まだだいぶある。
リューティ、いっぱい摘んでくるよ。

白い花が、丘に一面に咲いている。

縁地に花模様の絨毯を敷き詰めたように。

結婚式に使われる、可憐な花、ピアナ。

少女たちが一番好きな、縁起のいい花だった。

花束にすると、それほど甘くはない、すっきりした香りがするの
だが、ここではあまりにも数多く、濃く漂っているので、むせそう
になる。

彼は、その花を摘み始める。

抱えきれないくらいにピアナの花を摘んだ頃。

ふと気がつくと、太陽は、ほとんど沈んでいた。

太陽の最後のかけらが、山の向こうに隠れていくところだった。

彼は、言い知れぬ不安を感じる。

だが、まだあたりは明るい。

当分、この明るさは続く。

だいじょうぶ。帰ろつ。急いで。

そのとき、背後に誰かの気配がした。
人間ではない。

それは、一目見るなり、彼にもわかつた。

「あ……」

彼は、つめく。

体が固まって動かなかつた。

「珍しい髪と目の中の色の子供だな」

目の前に立つた人物が、彼を見下ろして、言つた。
黄色の目。瞳が針のようだ。

その人物の背後にも、同じ目をした男たちが複数、控えている。

「連れて行こう。私のアヌヴィムにする」

摘んだピアナの花が、地面に散らばつた。

彼は、それを拾えなかつた。

手を伸ばしたが、花は彼の手から、どんどん遠ざかつて行く。

ああ。

帰れない。帰れないよ。

父さま、母さま、兄さま、リュティ……。

目の前が暗くなる。

遠く、微かな音しか聞こえなくなる。

「シャルデイン? どこに行つたの?」

「シャルデイン! !

家族が彼を捜している。

父さま、母さま。ぼくはここにいるんだ。
真っ暗だけど、声は聞こえってる。

助けて……。

「シャルディン……！」

「シャルディン！ 兄さま！ もうアリアナの花なんかいらないから、
お願い、早く出でてきて……！」

兄の声が震えている。
リュディが泣いていた。

家族の悲痛な声が、次第に消えて行く。

帰らなくては。

帰ろう、みんなのところへ。

帰るんだ……。

だが、彼の周囲には、果てしない闇と、気の遠くなるような静寂
しかなかつた。

シャルディンは、目を開けた。

また、いつもの夢……。あの時の。
数え切れないくらい、何度も見た夢だ。

帰れなかつた家。果たせなかつた約束、……。
それを抱えたまま、長い長い時を過ごしてきた。魔の領域の中。

シャルディンは、起き上がつた。

窓の外は、闇が薄くなつてゐる。

もうすぐ、夜が明ける。

気の早い鳥の声も聞こえてくる。

そろそろ、行かなければ。

あの時の続きを始めなければならない。

帰るのだ、家族のところに。そして、約束を果たそつ。

両親は、もうこの世にはいないかもしれない。
兄とリュディは、元氣でいるだらうか。

リュディは、少女の時期を過ぎ、娘となり、花嫁となり、子供を
もうけ、もう既に孫もいるかもしれない。
そういう年齢になつていてはすだ。

まだ間に合つただろうか。

もし間に合つたら、ピアナの花をあの時よりもたくさん摘んで、
リュディに渡そう。

部屋の闇が、ぞろりと動いた。

シャルディンは、はつとして振り返る。

闇の中に、燃えるよつた血の色の目が四つ、光つていた。

(グリアモス！－)

闇の中から、一匹の巨大な真つ黒い猫が飛び出て、シャルディン
に襲いかかる。

逃げる間も、魔法を使う間もなかつた。
シャルディンは、グリアモスの前足で、ベッドに押さえつけられる。

「やあ、シャルディン」

グリアモスの後ろから、彼の主人、ジュネスが現れた。
ジュネスは眉を寄せ、自分のアヌヴィムを紫がかつた青い目で見下ろした。

「今回も、見つかってしまいましたね……」

シャルディンは、あきらめたよつて呟いた。

「そなたが私のところから逃げ出すのは、これで何度もになるんだ
ううね」

「四度目くらいですかね……」

シャルディンは、答えた。

「そんなに私がいやか？」

ジュネスが真面目な表情をして、訊ねる。

「あなたを嫌つてはいるとか、そういうことではありません。あなたは、私が仕えた多くの魔神族の中では、いちばんましな扱いをして下さったと思います。あなたを尊敬し、感謝もしています。けれども私は、行かねばならぬのです」

「前にそなたが逃げたとき、言つたはずだね。今度逃げたら、最後だと。わかっているね」

ジュネスは、シャルティンのそばにかがみこんだ。

「わかつていますよ……」

シャルティンは、呟いた。

「もう、四度目ともなると、そなたを庇うことも出来ぬ。他のアヌヴィムたちに示しがつかないのだよ。そなたに与えた魔法の能力は、返してもらひ。悪く思うな」

「思いません。あなたのお立場も、理解できますから」

「美しいシャルティン。そなたの醜い姿は見たくはなかつたが、仕方がない。實に残念だ。私の最後の口づけを受け取るがいい」

ジュネスは、シャルティンの唇に、自らの唇を重ねた。
ピアナの花の懐かしい香りが、どこからか、ふわっと漂つて、シヤルティンの意識は遠くなつた。

第5章

七都は、浅い眠りから覚めた。
目を開いて、天井を見つめる。

何かを感じた。

光のような、熱のようなもの。

七都の感覚をかすかに刺激して、消え去った。

誰かが近くで、魔力を使つた……？
シャルディン？
ジュネス？

テーブルの上で、何かが輝いている。
金色の中に、ちらちらと動く、光のようなもの。
猫の目ナビだ。記録係にもらつた、案内の目。
ナビが何かを捉えている？

七都は起き上がり、ナビをつかんだ。

金色の半球の中で、三つの色のついた影が漂っている。

これは、なに？

「拡大！」

七都は、ナビに命令した。

途端に、ナビの上に映像が現れる。
オレンジ色の影と、その後ろに、クリーム色の影が一つ。
オレンジ色の影は、手前に移動している。真っ直ぐに。

「えーと。こうこうの、映画で見たような。何かのゲームをした時も、コックピットにこうこうの、付いてた。何て言ったっけ。……レーダー探知機？」

七都は呟いた。

そうだよね、きっとねうだ。

このナビには、こうこう機能もあるんだ。

でも。となると？

このオレンジ色の影は、こうこうに近づいてきてるってこと？

今？ まさに？

もしかして、ものすくへ近い？

窓のガラスが、軽く音をたてる。

誰かがガラスをたたいたのだ。

七都は、びっくりした猫のように飛び上がる。

ガラスの向こうに、背の高い人影があった。
ネイビーブルーの目が、きらつと光る。

(ジュネス！?)

七都は、ナビとジュネスを見比べる。

ナビの中のオレンジは、動くのをやめていた。
では、ナビのオレンジ色は、彼だったらしい。
となると、背後の一つのクリーム色は、グリアモスということになる。

バルローの下あたりで、機械の馬に跨り、ジュネスを待つているのだろう。

七都は、窓を開けた。

太陽よけのフード付きマントで体を覆ったジュネスが、そこに立っていた。

「ジュネス？ どうしたんですか？」

「お別れの」「挨拶に……」

彼は、静かな眼差しで、同族の少女を見下ろした。だが、そこに何かを見つけて、ジュネスの目の中に、驚きが広がる。

彼は、指をそっと七都の額に近づけたが、触れずにそのまま静止させた。

銀の輪ははずして寝ていたので、七都の額はあらわになっている。ジュネスには、シルヴェリスとリュシフィンの、口づけのあとが見えているのだ。

「私は、これから魔の領域に帰ります」

ジュネスが、七都を眩しそうに見つめながら、言った。

「逃げたアヌヴィムも、見つけて始末しましたのでね」

始末したって……？

シャルディン？

ジュネスに見つかって、殺されたってこと？

七都は、ぎゅっと手を握りしめる。

「ナナト。一緒に来ませんか?」

ジュネスが言った。

「それは……」

七都は、口ごもる。

「行き先は違うが、同じ魔の領域の中です。風の都までお送りしますよ。その前に、あなたの怪我も治療しなくてはね。光の魔王ジエルフオートさまのお城には、どのようなひどい怪我でも回復されるという装置があるとか。それを使わせていただくことも出来ますよ」

楽だろうな、この人に同行させてもらひつたら。

七都は、一瞬、思つた。

傷も治してくれるみたいだし。送つてくれるし。

でも、だめだ。

風の都には、自分の力で、一人で行かなければ。

それに、同族とはいえ、やっぱり知らない人について行つてはいけないし、第一この人は、シャルティンを始末したとか言つてゐるもの。

「ジュネス。とてもありがとうございましたけど……。わたしは一人で來

るよつに言われてるんです。だから、一人で、風の都まで参ります

七都は、彼に言つた。

「しかし、もうすぐ夜が明けますよ。今、こゝにいては……」

「だいじょうぶです。わたしは、太陽は平氣だから。昼間でも外を歩けるんです。人間と同じように」

ジュネスは、ますます驚いて、まじまじと七都を見つめる。

「あなたは、早く行つたほうがいいですよ、ジュネス。太陽、だめなんでしょう。もう随分明るくなつてきてるから」

「……そうですね。そうします」

ジュネスは、微笑む。

「いつか、いざれかの舞踏会などで、あなたとお会いすることになるのがもれませんね。ナナト、お一人の魔王さまに愛されていらっしゃる姫君……。その時は、私と踊つてくださいますか？」

彼が訊ねた。

「えーと。わたし、踊れないんですけど……」

「では、その時までに、練習しておいて下さいね。約束ですよ。楽しみにしています」

「……あの、ジュネス」

会釈して、立ち去る。「する」のジュネスに、七都は、ためらいながら声をかける。

ジュネスは振り向いた。

「あなたの逃げたアヌヴィームのことですけど……。殺したんですか？」

「殺す？　とんでもない。そんな野蛮なことはしませんよ」

ジュネスは、肩をすくめた。

「でも、もうそんなに持たないでしょうね。魔法の鎧がなくなったら、ただの人間に戻るしかありません。もともと定められた寿命に従わなければならぬのです。彼の寿命は、既に尽きています。では」

三頭の機械の馬の音が、遠くなる。

七都はバルコニーに立つて、魔の領域に消えて行く光の魔神族の一一行を見送った。

月はまだ輝いているが、太陽の気配が強い。
白い靄が、風景の中のあらゆるものを見すみつけて、深く漂っている。

「シャルティン。ビニにいるの？」

七都は呟いたが、その声は、夜明けの風景の中に吸い込まれていぐだけだった。

七都は、部屋に戻った。

再び猫の目ナビを手のひらに乗せて、覗き込む。

「アヌヴィムのスキャンって、出来る?」

七都は言ったが、ナビは無反応だった。

「ここのあたりにアヌヴィムはいないってこと? もうか。シャルティン、もうアヌヴィムじゃなくなってるんだよね……。じゃあ、人間のスキャンをお願い」

途端に、ナビの中いつぱいに、赤い点が現れる。

「あすま。つまり、この宿の全員ってことか」

七都は、ため息をつく。

「じゃあね。死にそうになつている人間のスキャン」

だが、ナビは反応しなかつた。まるで、無言で抗議するようだ。

「じもつとも。そういう細かいのは、範囲外か。それか、もう、死んじやつてるの、シャルティン?」

七都は、しばらくナビの中の赤い点を見つめていたが、それを拡大させてみる。点は、さまざまポーズをした、人の赤い影になる。

「この赤い影が人間のエネルギーをスキャンしているのだとしたら、その強弱がわかるかも」

七都は、赤い点が固まっている地点を無視して、その外側を捲してみた。

すると、遠く離れたところで、一つだけ、青の中に抱え込んだ、ピンク色の影があった。横たわっている人間の形だ。

「見つけた！」

七都は、メーベルルのマントを羽織る。そして、バルコニーの手すりを飛び越え、難なく地面に降り立った。

ナビを頼りにしばらく進むと、野原が現れた。
靄が切れ、白い花が一面に咲いているのがわかつてくる。
すつきりしたよい香りが、あたりに漂っていた。

（ああ、この花、知ってる）

七都は、思い出した。
メーベルルと七都を弔うためにコードが持ってきた花束。その中にあつたのと同じ花だ。

鈴蘭を大きくしたような、可憐で、かわいらしい白い花。柑橘系の香り。

人間の食べ物の匂いは苦手だけど、この花の香りは、好き……。

七都は、そつと花をひとつ引き寄せて、香りを嗅いでみる。

その香りは、確かに癒されるし、落ち着くような気がする。魔神

族にとつては、そういう感覚を抱ける花なのかもしれない。
もしかしてコードは、そのこともわかつていて、この花を選んだ
のだろうか。

白い花畠の中に、靄を薄くまとめて、誰かが倒れていた。

「シャルティン？」

七都は、彼のそばに座る。

彼は、目を閉じたまま、動かなかつた。

「シャルティン。生きてる？」

「まだ、生きてますよ……」

彼が答えた。

だが、その声は、七都が知つてゐる彼のものではなかつた。
しゃがれた、聞き取りにくい声。
変化しているのは、声だけではない。

七都は、彼を見下ろした。

そこに横たわる彼の髪は、漆黒ではなく、銀色がかつた白。
顔からは張りも艶も消え、深い皺が刻まれてゐる。
顔だけではなく、首も、手も、老人のそれだつた。
本当の年齢は六十代前半くらいなのだろうが、八十年代、いや、そ
れ以上にしか見えない。

彼は、目を開ける。

その目は、薔薇色だつた。瞳は、深い葡萄色。

七都は、鮮やかな赤色をした、彼の目を覗き込む。

「なんか、随分様子が違つちやつたね」

「……これが、私の本当の姿です」

シャルティンが呟く。

「そんなに悪くはないよ。素敵なおじいさまだと思つ。きれいな目だね。莓ジユースみたい。髪は、パールホワイトのアクリル絵の具みたいな色だ」

「あなたの、私の目と髪に対する例えは全く理解不能ですが、まあ、それなりの贅辞だと推測しておきましょ」

シャルティンが言った。

「ジユネスさまの趣味ではなかつたので、魔法で髪の色も目の色も変えていました」

「わたしは、このほうがいいと思つよ。雰囲気あるもの。個性的だし。あなたにとても似合つてゐる」

「それは、どうも」

シャルティンは、七都を真つ直ぐ見上げた。

「どうどう私の頭も、おかしくなつてきたのでしょうか。もう朝だといつて、魔神族のあなたがここにいるなんて」

「わたしは、太陽の光に溶けたりしないの。朝になろうが、昼になろうが、外に出でていられるんだ」

「そうですか。驚きました」

「さつき、ジュネスが来たよ。夜明け前だといつのに、わざわざ寄つてくれたみたい」

「あなたの方が気にかかったのでしょうか。そういう方ですから」

「一緒に来ないかって言われたけど、断つちやつた」

「一緒に行かれても、問題はなかつたでしょうに。の方は、魔神族にしておくにはもつたいたいくらいの、いい方ですよ。女の子にもやさしいしね。育ちもいい。光の魔王さまのご親戚ですし」

「でも、あなたをこんなふうにしたのは、彼なんでしょう」

「の方からいたいた魔法の能力をお返ししただけ。それだけのことです。の方は、悪くない」

「……ジュネスのこと、とても慕つていたんだね、シャルディン」

「いちばんまともな」主人でしたからね

シャルディンは、穏やかに微笑む。

「で、動けないの？ シャルディン。全然？」

「そのようです」

「家族のところに帰るんじゃなかつたの？」

「もう、無理です。魔法がなくなつても、多少は動ける自信はありますですが、魔法は思つた以上に、私の体を蝕んでいました。間もなく私の命は尽きて、体は朽ち果てるでしょう。このピアナの花畠の中に」

「……ピアナってこうんだ、この花」

「これはね、結婚式のときに、花嫁が持つ花です。花束の中には花を入れると、必ず幸せになれるといつ言い伝えのある花……。魔神族が好む花でもありますよ。私は、この花を摘んで、妹にあげる約束をしていました」

シャルティンが言つた。

「じゃあ、その約束、果たさなきゃ」

「もひ、摘む元氣をえありません」

シャルティンは、目を閉じた。

透明な薔薇色が、皺の中に消えてしまひ。

「シャルティン？ ねえ、シャルティン。また、言ひ合つこじよ
うよ」

「そんな気力もありませんよ……。ナナトさん、もひ、構わないでください。あなたも、行かねばならぬところがありのはず。行ってください。どうか……」

七都は、彼の手を取つた。干からびた木の枝のよつだつた。体温も感じられない。

「シャルティン。わたし、あなたを助けられないのかな」

七都が咳くと、彼は目を開いた。

「では、ナナトさま。私をあなたのアヌヴィムにしていただけますか？」

「それは……無理だ……」

答えに詰まつた七都を見て、シャルティンは、微笑む。

「冗談ですよ。しかし、あなたも嘘をつけない方だ。心の動きがわかりやすく顔に出ますね。そんなに困ったような顔をされなくとも」

「あなたも、冗談言う気力は、まだあるんじゃない」

「しかし、冗談にする必要もないですかね……。私も、まだ死にたくないです。確かに、あなたはアヌヴィムを持つには少し若すぎるし、ご自分の魔力もまだ十分に使えていない。おまけにひどい怪我をされていて、エディシルが弱すぎる。だが、あなたが生来お持ちになつている魔力の強さに賭けてみるのも、いいかもしれません」

「わたしは、アヌヴィムの魔女の人間に言われたよ。素性がわからぬいし、魔力もちゃんと使えないし、幼すぎるから、取り引き出来ないって」

「その人は、正統派ですね。人間としても地位に恵まれていて、教養があつて、おそらく代々アヌヴィムで、仕えている魔神族も、かなり身分が高い人なのでしょう。だが、私は、そうじやない。いろんな魔神族のもとを渡り歩いてきました。自分の意思ではなかつたのですけどね。売られたり、賭けの道具にされたり……。エディシルも、与えられるのではなく、自分から取りに行くことを強要されました。ゆえに、あなたの素性も、魔力があまり使えないことも、幼いことも気にしません」

「だけど、あなたをアヌヴィムにするにしても、やり方がわからな
い」

「私が知っています。というか、私にエディシルをくださればいいだけですよ。あなたが出来ないのであれば、私のほうから、取りにいきましょう」

「エディシルを……？」

「わかつていますよ。怪我をされている今のあなたから、エディシルを取り上げることは、とても酷なことです。だから、無理にとはいいません。ただ、私を助けてくださる気がおありなら、それなりの覚悟をしていただかないといけませんので……どうされますか？」

？

七都は、深く呼吸をする。

改めて考えなくとも、たぶん答えは最初から決まっている。

今の彼を助けることが出来るのは、自分しかいない。そして彼を助けるには、その方法しかないのだ。

それはよくわかっている。ならば、あとは、自分の気持ちに踏ん

切りをつけて、それを一つ行動に移すかどうかだけになる。

七都は、彼に言った。

「わかった。では、今からあなたを助ける。その気持ちは変わらない。あなたは、家族と会わなきやいけないよ」

「では、ナナトさま。わたしに口づけを

「……」

シャルティンは躊躇している七都を見上げて、微笑んだ。

「せ、やはり顔に出る。また、困った顔をされた」

「だつて……。やはり、こわいもの

「では、手を。手なら、こわくないですか？」

シャルティンは七都の手を取り、自分の唇の上に乗せた。

「今度あなたがアヌヴィームを作るときは、ちゃんと口づけをしてあげてくださいね。」これは、少し屈辱ですよ。手を使つなんて、魔王わざわざうごなものです

「じめんなさい……」

「では、体から力を抜いて。楽な感じで、じつとじつおこしてくださいね」

シャルティンの唇に乗せた七都の手のひらが、次第に熱を帯びる。

七都は、目を閉じた。

体の中のすべての血の流れが、そこに向きを変えたような気がする。

そして、それは、ゆっくりと動き始める。

七都の腕に、手首に、そして、指の先に。そこからさりげに、シャルディンの唇を通して、彼の中へ。

七都の体の奥底で、何か大切なものにひびが入ったような気がした。

それは、否応なく引きちぎられていく。

もぎ取られ、流れの中に溶け、体の外に行ってしまつ。

身の毛がよだつような喪失感だった。

体の一部が流れ去つていく。

止めようとしても、止まらない。

恐ろしきほどの勢いで、消えて行く。

だめだ。今失うには、あまりにも早い。

まだ、何にも用意が出来ていない。早すぎる。

「いやだ！！」

七都は、思わず叫んだ。目を大きく見開く。

だが、何も見えなかつた。赤黒い闇しかそこには存在していない。

(止めてはなりません、ナナトさま)

シャルディンの声が、頭の中に聞こえた。

（だいじょうぶですよ。これは、エディシルの流れ。魔神族にとって、誰かにエディシルを『える』という行為は、そんなに不快なものではないはずです）

不快なものじゃない？

確かに、グリアモスにエディシルを食べられたとき、妙な快感みたいなものはあつたけど……。

あれのこと？

だが、今は、そういうものは感じない。

何か、胸のあたりの刺激が、それを邪魔している。

これは、何なのだろう……。

胸のあたりに、刺すような刺激が絡みついていた。
何千本もの針でつつかれているような、刺激。

それはエディシルの流れに触発されるように、次第に強くなつてくる。

やがて、針ではなく、何千本もの剣で滅多打ちこまれているような、恐ろしい感覚が胸に広がつた。

グリアモスに引き裂かれた傷だ。それが、叫ぶよつこ、うずいている。

痛い……。

痛い？

これは、痛み？

そんな。

魔神族は、痛みを感じないはずなのに……。

七都は、愕然とする。

だがそれは、痛みだった。

元の世界でしか感じるのはない、痛み。

今まで感じなかつた怪我の痛みが、一度にまとめて押し寄せてきたようだつた。

何重にもなつて。何倍にもなつて。

胸の傷に、何か劇薬でも塗りこめられたようだ。

鈍い痛みと鋭い痛み。

いろんな痛みが合わさつて、傷の中でのたうちまわつている。

何か痛みで出来上がつたおぞましい生き物がそこに閉じ込められ、滅茶苦茶に暴れているようだつた。

傷は再び引き裂かれ、暗黒の傷口は、果てしなく広がつていく。その感覚が確実にあつた。リアルすぎるへりついこ、感じられた。

七都は、痛みと恐怖に耐え切れず、悲鳴をあげる。

(やめて！ こんなのは、我慢出来ない……)

シャルディンは、彼の唇から手を引き剥がそつとする七都の腕を両手でつかんだ。

(ナナトさま！ どうか、ご辛抱を。共倒れになります！)

シャルディンが、七都の頭の中で叫んだ。

でも、痛い！

痛いよ！！

間違いなく傷が大きく広がっている。

そのうちそこから体が引き裂かれて、ぱらぱらになってしまつ……

……

分解して、暗黒の空間の中に吸い込まれてしまつ……

(わう思つたら、本当にわうなつてしまこますよー)

シャルティンの声が響く。

(あなたは、私を助けるとおっしゃつた。どうか、その言葉に責任をお持ちになつて、それを最後まで果たしてください。私を助けてください……)

(……)

七都は、見えない目をカツと開いた。

耐えられそうもない痛みをそのままダイレクトに感じじることを放棄し、シャルティンの唇に乗せてくる自分の手に意識を集中せようとする。

だが、それらはしつこく触手を伸ばし、その中に七都を取り込もうと襲ってきた。

もう少しだ、もう少し。

もう少しだけ我慢したら、あとは、受け入れる。ひとつひとつかつてやる。

だから、そこでおとなしく、止まつているのだ。そこから動くな。

七都の唇から、うめき声がもれる。自分でもぞつとするよつな声

だつた。

シャルディンの顔に、血の気が戻っていく。
その枯れ枝のような指にも、腕にも、ふっくらと肉がついていった。

もはやそこには、死にかけた老人などではなく、生気に満ちた美しい青年だつた。

シャルディンは、七都の手をゆっくりと唇からはなした。
エディシルの流れが停止する。

途端に、抑えていた痛みが、容赦なく、そして待ち構えていたよう^うに、七都を飲み込む。

七都は、気を失つて、彼の隣に倒れこんだ。

シャルディンは、起き上がつた。

白銀の髪が揺らめいて輝き、鮮やかな薔薇色の目があたりを見回す。

そして、彼は、ピアナの花に囲まれて、目を見開いたまま静かに横たわつて、魔神族の少女を見下ろした。

白い陶器のような肌。薄紅の花びらのような唇。

太陽の光を通すと、緑がかつた黒髪は深い緑色に、透明な赤紫の目は、暗い赤色に見える。

多くの魔神族と関わってきた彼も、太陽の光の下で魔神族を見るのは、初めてだった。

彼は七都を抱え上げ、金色の朝の光に照らされた白い花畠の中を、

しつかりとした若者の足取りで歩き始めた。

誰かが、そつと頬をなでる。
やせしぐ、いとおしげに。

ああ。ここには、どこだろ？

そうだ。グリアモスに襲われて、カディナに背負われて……。
カディナが、ゼフィアとセレウス姉弟の館に連れてきてくれた
んだ。

頬に触れていく、熱すぎる体温。

じゃあ、これは。
この体温は……。

「セレウス？」

七都は、目を開けた。

シャルティンが、そこにいた。

莓ジユースのような、きれいな日が七都をみつめている。
彼の輝くパールホワイトの髪の背後には、明るい昼間の空を切り
取った窓があつた。

「残念ながら、私はセレウスさんではありませんよ」

彼が、穏やかに微笑む。

そうか。あれから、随分いろいろあつたんだ。

わたしがいるのは、あの町の、あの館じゃない。

七都は、徐々に、現在の状況を把握する。

「シャルティン？」

七都は手をのばして、シャルティンの顔に触つてみた。

「シャルティン。若くなってる……」

「あなたのおかげです」

シャルティンは、頭を下げる。

「魔法使いに戻れたの？ わたしのヒティシリルで？」

「はい。でも、あなたの怪我は、ひどくなってしまいましてね」

「怪我が……？」

「まだ痛みますか？」

「痛みは全然ないけど……」

「それはよかったです。正直、あせりました。魔神族が痛いなどと、泣き叫ぶなんて。きっと、無理をしてはならないという、あなたご自身のお体からの警笛なのでしょうね」

そこで七都は、ベッドに寝かされていたことに気づいた。

あの宿の、七都の部屋の中だ。
胸に、新しい布が巻かれている。

「んん？　え？」

「げ。裸だ。

えーっ！…………！
えーっ！　えーっ！…　えーっつつ…………

「どうかされましたか？」

シャルディーンが、心配そうに訊ねる。

「み、見たの、胸の傷。そ、それに……」

「そりゃあ、見ますよ。あなたは私の『主人ですかね』

シャルディーンが眞面目な顔をして、言ひ。

「おいたわしいです。恐ろしい傷あとだ」

「な、なんでわたしは、服着てないわけ？」

「ああ。先ほど、体を拭いてさしあげましたので」

「…………」

「…………」とは、隅々まで見られてることだよね……。
七都は、思わず毛布を目の下あたりまで引っ張りあげた。

「何か、お困りなことでも？」

シャルティンが、不思議そうに言った。

落ち着け。

彼は、アヌヴィム。

そう、わたしのアヌヴィムなんだもの。わたしの世話をしてくれてる。要するに、看護士さんと同じ。あせることも、恥ずかしがることもない。でもつ。

七都は、ため息をついた。

ゼフィアは、同性だったから、なんとか我慢もできて、そのうち恥ずかしさもなくなつた。だが、彼は異性だ。抵抗がありすぎる。体を拭かれたのは、眠っていたから仕方がないとしても、もし起きているときにそんなことを提案されたら、絶対に、いやだ。どんなに気を悪くされても、拒否するしかない。

こんなことでいちいち恥ずかしがついたら、この先、相当困ることになる。

あの時のゼフィアの言葉は、じつにひととも意味していたのか。七都は、何度もため息をつぐ。

「あなたの『主人の中には、当然女性もいたわけよね？』

七都は、シャルティンに訊ねてみる。

「はい。いましたよ。でも、私は、彼女たちには、あまり好かれて
いなかつたようです。最初は皆様、おやさしいのですが、そのうち
憎まれて、結局、強制的に、別の主人のところに行かせることに
でも、その人たちの世話をしていたんだよね」

「はい。それが何か?」

「ううん、べつに」

やつぱり、彼にとつては、普通のことなのだ。
アヌヴィムとして、女主人の世話をすることは、ごく当たり前の
こと。
恥ずかしがることはないのかも知れない。
ゼフィアのときと一緒にだ。

だけど。

シャルティン、わたしを見て、本当に何とも思わなかつたのかな。
ゼフィアみたいに、ただ淡々と拭いてくれただけ?
優秀な看護士さんとして?

「わたし、どれくらい眠つてた?」

七都は、彼に訊ねた。

「三日三夜です」

「三日? 一泊だけの予定だったのに……」

「仕方がありませんよ。怪我をしている上に、たくさんのお荷物を失つたのですから。しつかりお眠りにならないといけません。蝶は、ひっきりなしに、窓から飛んできました。群れになつて。でも、その度に、群れ」となくなつてしましましたけどね」

「つまり、わたしが食べちゃつたわけね」

「そうですね。あなたに触れることもなく、この部屋に入った途端、片つ端から消えました。なんというか、豪快で、驚愕するような、でも、幻想的な光景でした」

「やつ……」

「眠つたまま無意識で、蝶を群れ」と、か。

我ながら、ぞつとする。

「でも、三口立て。シャルティン、あなたを三口も止めてしまつた。あなたは、家族のところへ、すぐに帰らないといけない」

「いえ。私は、あなたのアヌヴィームの魔法使いです、ナナトわざ。あなたからいただいた魔法の力がこの体の中にある限り、あなたに忠誠を……」

シャルティンは、ベッドの横にひざまずき、手を胸に置いて、丁寧に頭を下げる。

「あなたが風の都に行かれるなら、私はあなたに付き従い、あなたを守りましょ」

ああ。

それはきっと、セレウスがわたしに言いたかつた言葉だ。

七都は、シャルティンとは対照的な、緑色をしたセレウスの目を
思い浮かべた。

「あなたを風の都に無事に送り届けたら、そのあと、私は家族のも
とに帰ります」

「それじゃ、遅すぎるよ、シャルティン」

七都は、彼の肩に手を置いた。

「IJの二田の間だつて、あなたの家族の誰かに、何かあつたかもし
れない。風の都なんて、いつたどりつけるかわかつたもんじやない
よ。今すぐに帰つて。わたしのことなんか構わずに」

「しかし……。私があなたのアヌヴィムである以上、私には、あなたを守る義務があります」

「わたしに関しては、そんな義務なんかないよ。あなたは自由だ。
どこにでも、あなたが行きたいところに行つていいい。そしてそのま
ま、わたしのところになんか戻つて来なくともいいから」

「ですが……」

「だつてあなたは、ジュネスをほっぽらかして、逃げたわけじゃない。
家族のところに帰るためとはいえ」

「ジュネスさまには、たくさんアヌヴィムがいます。でも、あなた
には、私しかいないでしょ？」「う？」

「だいじょうぶだつてば。それにね。アヌヴィムの魔法使いがわたしに同行したがったのを、わたしは断つてしまつたの。だから、わたくしは、同じアヌヴィムの魔法使いであるあなたを連れて行けない。彼に対する裏切りになつてしまつ」

「それは、セレウスとかいう方ですか？ セツキ、あなたが呼びかけられた……」

シャルディングが訊ねる。七都は、頷いた。

「その方は、あなたのアヌヴィム？」

「ううん。彼に魔法の能力をあげたのは、わたしのお母さんみたい

「あなたの母上が……」

「でも、随分前のことだから、セレウスの魔法の能力は、もうすぐなくなつてしまつらしいけど」

「あなたの母上は、風の都に？」

「行方不明。でも、魔の領域のどこかにいるのかもしれない」

「母上がそういう状態ならば、ではあなたは、そのセレウスさんをあなたのアヌヴィムにしてあげるべきなのでは？」

シャルディングが言った。

「わたしのアヌヴィムに？」

セレウスに、面と向かってそんなことを言われたことはなかつたが、当然、彼はそう思つてゐるに違ひなかつた。

もし彼が、自分がもうすぐ魔法使いでなくなることを知つてゐるとするならば、なおさらのこと……。

「そうだね。わたしが風の都に到着して、素性がわかつて、もつと魔力が使えるようになつたら、考えなければならぬのかもしれない……」

でも。

七都は、ふと思つ。

セレウスに、主人として、じまじまと世話をされるのは、いやかも……。

だつて、彼がわたしに恋愛感情を持つてゐらしいうこと、わかつてしまつてゐるんだもの。

七都は、セレウスがにつこり微笑みながら、「そ、お体をお拭きしましょう」なんて言つてゐるシーンを想像して、頭を抱えたくなる。

「彼のお姉さんは、彼は、ただの人間に戻つたほうが幸せなんじゃないかつて言つてたけどね」

「それを決めるのは、セレウスさん自身ですからね。セレウスさんがあなたのアヌヴィムになつたら、私は、当然仲良くなさせていただきますよ」

シャルティンが言つた。

「とにかくね。あなたは、すぐに帰つたほうがいいよ。わたしは、今までひとりだし、これからもひとりで行く。心配しないで」

「しかし、そのお体で？ 今まで旅を続けて来られたのさえ、不思議なくらいですよ。しかも、今回のことと、前より傷が深くなっています」

「まあ、なんとかなるよ」

「その、なんとかなるとこいつ確証は、ビームから来てこられるのですか？」

「なんとなく……」

「なんとなく？ 信じがたいです」

「……」

「のままでは、また言い合ひにならやう……。

七都は、彼の薔薇色の目を真つ直ぐ見つめる。そして、彼に言った。出来るだけ威厳をこめた、きつめの口調で。

「シャルティン。これはわたしの命令です。帰りなさい。主人の命令には、おとなしく従いなさい」

シャルティンは、じばりく黙つて、七都を見つめ返した。

「……わかりました」

やがて彼が、あきらめたよひに歸る。

「では、私が家族のところに帰つて一段落したら、風の都にあなたをお訪ねしてもよろしくですか？ そこにおられるのでしょうか？」

「わたしの家は、別の世界にあるの。たとえ風の城に行つても、たぶん、そこには住まない。しばらくしたら、自分の家に帰るつもり。だから、わたしを訪ねてきても、わたしあいな」と思つ

「風の城ですか……」

シャルディンは、じつと七都を見つめる。

「あなたは、リュシフインさまの姫君？ 私は、とんでもない方のアヌヴィムになつてしまつたかもしませんね」

「わたしがリュシフインの何なのは、わからない。たぶん、親戚じゃないのかな、ジュネスと光の魔王さまみたいに」

「でも、あなたがおられなくとも、いつか訪ねますよ。風の城に行くには、勇気がいりますけどね。しかし、私が行つて、果たして入れてくれるのでしょうか」

「もしわたしがそこの姫君なら、あなたのことばは『おへかう』

「お願いしますね」

シャルディンが、微笑んだ。

「では、ナナトさま。」無事で

「うん」

七都は、シャルティンを見下ろした。

彼にいとおしさを感じる。

それはもちろん、恋愛感情などではなくて、たとえば、ソファの上で、安心しきつて平和に眠っているナチグロ＝ロビンを眺めたときを感じるような、そんな、くすぐつたいような、なじめるような感情。

彼が、七都の力の一部をその中に持つているからなのかも知れない。

魔神族は、自分のアヌヴィムに対して、こいついう感情を抱くものなのだらうか。

七都は、シャルティンの首に手を伸ばし、彼の頭を抱いて、引き寄せた。

そして、彼の唇に、そつとキスをする。

ついばむような、軽いキス。

人間にに対するあの衝動を感じる間もない、短いキスだった。

「あなたに口づけをせずに、アヌヴィムにしてしまったから。せめてものお詫びといつか、埋め合わせです」

シャルティンは、黙つて七都を見つめた。

彼は、真つ直ぐに七都の目を覗き込んでくる。

その赤色の中には、魔神族に対する恐怖など、微塵もない。さまざまなことを経験し、知ってきた、穏やかで静かな目。

けれども彼は、次の瞬間、にやつと笑った。そして、七都に言つ。

「いけませんね、ナナトさま。そういう格好で、こういうことをしては」

「え？」

「たいていの男なら、そそられますよ。襲つてしまつかも」

七都は、腰のあたりまで落ちてしまつていた毛布を、素早く引き上げる。

シャルティンは、くすつと笑つた。

また、おちよくられてる！

七都は、彼を睨む。

「シャルティン。まさかとは思つけど。わたしが眠つている間に、なんにもしなかつたよね？」

「は？ するわけないでしょう。あなたはわたしの『主人』で、おまけに怪我人ですよ」

シャルティンが、真面目な顔をする。だが彼は、すぐに表情を崩して、微笑んだ。

「ただ、たっぷりと鑑賞はさせていただきましたけれどね」

「か、鑑賞ー？」

「あなたの体は、非常に美しい。私は今まで数多くの魔神族の貴婦人やら少女やら見てきましたが、群を抜いています。久しぶりの田の保養でしたね」

「……殴る……！」

シャルディンは笑いながら、七都が振り下ろした手をつかんだ。

「そんなことばかり言つてからかつてたから、女主人たちから嫌われたんでしょう！？」

「おや、らへ」

「女性にはやせじやしないと……」

シャルディンは、いきなり七都を抱きしめた。
七都の肩に両手を回し、髪をそつとなでる。

「あのね、アヌヴィムのほうから、主人に対して、そういうことしちゃいけないんだよ」

「知っていますよ。でも、私は気になませんから」

「少しは、気にしようよ」

シャルディンは、七都の耳のそばに口を寄せ、薔薇色の田を半分閉じた。

「どうか、ナナトさま。あなたには、アヌヴィムの魔法使いがいるということを忘れないでください。そして、いつでも、私を呼んで

くださー。あなたが危険なときでも、つらいときでも、何となく寂しいときでも。私は、どこにいようと、あなたのところへすぐ参ります」

「……ありがとうございます。わたしの魔法使こせよ。とても心強こです」

「では、私は行きます」

「氣をつけて……」

シャルティンは、七都から離れて、立ち上がった。

「シャルティン。最後に約束して。女の子をおひくりない。やめしへあるつて」

「わかりました。そひじまわ」

彼は返事をしたが、そのままにせず、相変わらずの口せんが、くつついでいる。

「全然、そうしようなんて思ひにならじよ」

「そんなことないですよ」

笑いを躊躇しながら、彼が言つ。

「シャルティン……！」

彼は、七都に向かつて、とても優雅に、そして、口の上もなく深く、お辞儀をした。

お辞儀をしたポーズのまま、彼の姿が、ぼやける。

やがて、パールホワイトの髪も、莓ジュース色の目も、七都の前から、完全に消えてしまった。
空気に溶けてしまつたかのようだつた。

「行つちやつた……。瞬間移動……テレポーテーションっての?
わたしもああいの、出来るようになるかなあ」

七都は、ベッドに横たわる。

もう少し眠つて、それから目が覚めたら、わたしも出発しよう。
魔の領域へ。

三日も遅れてしまつたもの。急がなきや。

セレウス……。

わたしがアヌヴィームの魔法使いを作つたことを知つたら、氣を悪くするかな。

すぐに、暗く落ち込んだじやうからな、彼は。

でも、シャルティンとセレウスつて、あまり性格合ひやしないよね。

セレウスがシャルティン、苦手かも。

案外、ものすごく気が合つて、無一の親友になつちやつたりするのかもしれないけど。

七都は、目を閉じた。

けだるい、だが、心地よい眠りが、すぐに全身を包み込んだ。

第8章

ピアナの、涼やかなよい香りが漂つ。空は澄みきって、白い羽根のような雲が、幾つも浮かんでいた。

穏やかな、晴れた日の午後。

シャルディンは、抱えきれないくらいのピアナの花を摘み終わり、それを持って丘を下る。

もう少し歩くと、家が見えてくるはずだ。

懐かしい我が家。まだあるのだろうか。

そして家族は、今でもそこに住んでいるのだろうか。

あの時。

ここで、時間は止まってしまった。

黄色い猫の目の魔神族に出会ってしまった、この場所で。

シャルディンは、ふと立ち止まって、あたりを見渡す。

今、彼らの姿はない。遠い遠い時間の果てに、過ぎ去ってしまった。

もう、誰も邪魔をするものはない。

だから、続きを始めよう。もう遅いのかもしれないけれど。

背の高い草の間から、一人の少女が飛び出してきた。
シャルディンは、少女とぶつかりそうになる。

金色のやわらかい長い髪を、少女はおさげにしていた。
薄い空色の目が、驚いてシャルディンを見上げる。

「リューディーー？」

シャルディンは思わず呟いたが、思い直した。

そんなはずはない。

あれから五十年以上たっているのだ。
この少女がリューデイであるはずがない。

だが、彼女に……妹に生き写しだ。

「シャルディン？」

少女が、首をかしげて彼に訊ねる。

シャルディンは、ただ黙つて、彼女を見つめた。
私の名前を知っている……？

「あなた、シャルディンね？」

少女が、につこりと笑った。

「きみは、リューディ？　いや、そんなことがあるわけがない。だが、
もしきみがリューデイなら……」

「あなたがその花を渡さなきゃならないのは、私じゃないよ

リューディに似た少女は、シャルディンの手を取つた。小さな手が、
しっかりと彼の手を握りしめる。

「行きましょ、シャルティン。じゅりよ。おつまで道、覚えてる?」

「覚えてるよ……。きみは誰?」

「私は、マーシイ。シャルティン、本当に赤い目と銀の髪をしているのね。おばあさまの言つとおつだった。それに、とてもきれい」

「きみは……リコティの孫?」

「そうよ。私、おばあさまの子供の頃にそつぱうだつて言われるの

マーシイはシャルティンの手を引いて、草の間の細い小道を進む。

やがて草が切れ、こじんまりとした館が現れた。
シャルティンが生まれ、少年の頃まで育つた、懐かしい家。

時間の見えない積み重ねが館をくすませ、息の詰まるような重厚さが、彼の記憶よりもはるかに増していく。

けれども、館は十分に手入れされ、そこに住む人々の、日々の息遣いが感じられるような、あたたかい雰囲気が全体に満ちていた。

シャルティンは、マーシイと手をつなごまま、じょじょに立停止んだ。
テラスに、誰かがいる。

椅子に腰掛け、うとうとと眠っている、一人の老婦人。

白くなつたとはいえ、まだ豊かな量の髪。それを一本の三つ編みにして、背中に垂らしている。

肌は、老いてくすんでいるものの、健康的な艶があった。

顔には、悲しみやつらさに耐えた分だけの皺が刻まれてはいたが、
彼女は、穏やかな表情をしていた。

「おばあさまだわ」

マーシイが言った。

シャルティーンは、椅子で眠るリュディの前に立つ。
そして、やせこじ目で彼女を見つめた。

リュディ……。

きみは、ずっと自分を責めていたのだろうね。
私が魔神族に連れて行かれたのは、自分のせいだと。
自分がピアナをせがんだせいだと。

涙を枯らすことなく、いつも私の姿を探して、ピアナの花畠を見つめていたのだろうね。

少女の時期を過ぎて、娘になつて、母になつて、年老いても。
あの時から、ずっと、ずっとと……。
きみの時間も、止まつたままなんだ。

リュディは、目を開けた。

少女のときと全く同じ、薄い空色の目が、シャルティーンを見上げる。

「シャルティーン？」

シャルティーンは微笑んで、リュディにピアナの花束を差し出した。

「リューティ。随分待たせてしまったけど。ほい、約束のピアナの花だよ」

「シャルティン、遅い！ どれだけ待たら氣が済むの？ ピアナの花なんて、むづびりでもよかつたの？」

リューティは、シャルティンにしがみつく。

「ああ、これは、夢なのかしさ。本当に……本当にシャルティンなの？」

シャルティンは、リューティを抱きしめた。

「夢じやないよ、リューティ。ぼくは帰ってきたんだ」

「シャルティン。みんな、あなたを待っていたのよ。ずっと待つてたの……」

「わかつてるよ……。ごめんね」

リューティは、顔をくしゃくしゃにしてた。少女の頃の彼女が、そこにいた。

「わたし……わたし、もつピアナの花は、見るのもいやになつたの。あれから摘んだことはなかつたわ。自分の結婚式のときだけ、持たなかつたの」

「うそ。きみのことだから、やつなかつたんじゃないかなつて、ずっと思つてたよ。本当にごめんな。これからは、好きなだけピアナの花を摘んであげるよ。ほら、きみの青い目に、よく映える」

シャルティンは、ピアナの花をリコティの三つ編みの髪に挿した。

リコティの目から、ぽろぽろと涙がこぼれる。

彼女は、子供の頃によくやつたように、両手で皿を無理やりこすつた。

「リコティ……。父さまと母さまは？ それから、兄さまは？」

シャルティンは、少しためらしながら、妹に訊ねた。

「母さまは、元気。兄さまも。父さまは、むづくないの。でも、よかつた。間に合つたわ。会つてあげて」

リコティは、涙を拭いながら立ち上がる。
そして、マーシィに声をかけた。

「マーシィ。大おじさまをすぐ呼んでき。弟が帰つて来たつて」

「うふ。大おじさま、飛んで来るわ、きっと」

マーシィは笑つて、駆け出した。

リコティは、シャルティンを抱きかかるよつて、寄り添つた。

一瞬でも離すと、たちまち彼が消えてしまひのではないかと心配しているようだ。

シャルティンは、ピアナの花を抱えたリコティと並んで、家に入る。

五十年前、帰れなかつた自分の家の中へ。

「シャルディン？」

「シャルディンなの？」

部屋の中から、懐かしい、けれども、彼が覚えているよりもはるかに年老いた声が聞こえた。

そして彼は扉を開け、彼の父と母が彼を抱きしめるために、大きく手を広げて待つその部屋の中へ、足を踏み入れる。

七都は、ほんやりとした意識の中で、その光景を眺めていた。

シャルデインが、少し落ち着いてから、改めて七都に送ってきてくれた映像なのか、リアルタイムで起こっていることを、彼を通して七都が見ているのかは、わからなかつた。だが、彼が家族と会えたことは、確かなようだ。

よかつたね、シャルデイン。間に合つたね。これからずっと、家族のそばにいるんだよ。今までいられなかつた分、ずっとね……。

七都は、目を開けた。

見知らぬ人々の顔が輪になつて並んでいるのが、フードの間から見えた。

全員、七都を見下ろしている。

七都は、飛び起きた。

「なんだ、生きてるじゃないか」「行き倒れじゃなかつたのか？」

「誰だ、女の子が殺されてるなんて言つたやつは、

人々が、驚き、あきれで口々に言ひ。

「な、なんなんですか？」「

七都は、あたりを見回した。

さつき、たまたま見つけて寝転んだ、ピアナの花煙。

誰もいなかつたはずなのに、旅人とおぼしき十数人の人々が、七都を囲んでいた。

「お嬢さん、ここで何をしてたの？」

中の一人が、七都に訊ねる。

「何つて。うたた寝といつか……言わば、すっかり昼寝……ですか？」

七都が答えると、人々は、そろつて合図するように、ため息をついた。

「あのねえ、アヌヴィムの魔女さん。いくら昼間だからといって、人間に悪いやつはたくさんいるんだよ」

「そうだよ。こんなところに寝ていたら、危ないつたらありやしない」

「もつと気をつけなくちゃ」

「ごめんなさい。心配をおかけしました」

七都はあせつて、人々に頭を下げる。

旅の人々は、「まったく」とか「人騒がせな」とかいう言葉を口にしながら、ぞろぞろとピアナの花畠から街道に向かって、移動し始める。

あつという間に、人々の群れは、消えてしまった。

そこに寝転んだときと同じように、風景の中にあるのは、空とピ

アナの花畠だけになる。

「！」なら、道からかなりはずれてるし、目立たない所だから、誰も来ないと思ったのに。甘かったな。何で昼寝しただけで、見知らぬ旅人たちに、あやまらなきやなんないんだか。心配してくれたのはわかるけど」

七都は、立ち上がる。

「やつぱり寝るときは、きちんと宿を探して、泊まつたほうがいいってことか」

七都は、腕を伸ばして、伸びをした。

少し眠つたので、気分がいい。

また当分、歩けそうだ。

七都は、ピアナの花を何本か摘んで、空になつたカトウースの容器の中に差し込んだ。

今夜は、この花をベッドの枕元に置いて寝よう。そう決める。

そういうえば、コードは、当然この花のことを知つてて、この花をメーベルルとわたしに持つてきたのよね？

これは、結婚式のときに、花嫁が持つ花。

花束の中に入れると、幸せになれるという伝説のある花。

未婚のまま死んでいく、魔神族の一人の女性のために、あなたはこの花を摘んだんだね。

せつなすぎるよ、コード。

七都は、摘み取ったピアナの花の匂いをかいだ。

心が落ち着くもつた、でも、ビートルを織るもつた、
不思議な香り。

シャルティン。

また、いつか会えるかな。

取りあえず、わたしのファーストキスは、シャルティンってことにしておこう。

自分から望んで、彼にキスをしたといつもにおいても。
シャルティンが相手なら、不満も不足もないかもしない。
彼、素敵なものね。美しさにおいては、ナイジェルにだってひけを取らない。性格はともかく。

「でも、やっぱり、残念ながら、恋愛感情はないんだよねー

七都は、ためこも混じりに咳き、再び歩き始める。

「ところで、わたし、舞踏会のダンスの練習、しなきゃいけないのかなあ」

七都が立ち去ったあと、誰もいなくなつたピアノの白い花畠の間に、風がやさしく吹き渡つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3712m/>

紅目の魔法使い <ダーク七都3・赤い眼のアヌヴィム>

2011年7月26日03時23分発行